

まどい

第197号

秋田県羽後町仙道中学校昭和30年卒

1955（昭和30年）創刊

2010年10月20日発行

186-0003 東京都国立市富士見台 3-6-404
tel/fax 042-574-8694 ・直 090-2332-4408

まどい編集室

http://www32.ocn.ne.jp/~madoi/
mal: madoi30s@cc.mbn.or.jp

金子健治さん逝く

去る七月二十一日に心筋梗塞のために他界されました。

健治さんは長い間「パーキンソン病」と戦ってこられたのですが最近では歩くこともままならない状態でもありました。ここに来て熱を出し三日ぐらい寝込んでいたのですが結局帰らぬ人となってしまいました。

私たち同級生ではこれで十一人を失ったことになりました。

ご遺族のみなさまに心からお悔やみを申し上げますとともに、健治さんのご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

また一人同級生が逝く

高橋孝之助

体が大きいわりに、とても性格の優しい金子健治君が逝った。長い間病んでいたと聞きましたが残念です。同級会などでほとんど参加する事もなかったが、必ず名前がでたものでした。

中学生の頃は音楽クラブなどに入っていたと思います。休みの日などはお母さんと二人でゲタを売り歩いていました。仙道、田代あたりではゲタも売れなかったことでしょう。我が家にも寄ってくれたがゲタ・ゾウリなどは全部自分の家で父が作っていたから、買うことはできずつらい思いもした。

岩手県で地震があったとき電話を話

しました、何十年ぶりかで……元氣

そう声だったのに……。

どうか安らかに眠ってください。先に

逝った仲間たちと一緒に。 合掌

逞しい人でした

柴田友幸

先日、佐藤芳雄さんより「金子健治さんが永眠された」との連絡があり、同級生というよりも同年齢として残念に思いますが一筆いたしました。

「明日は我が身」とあるように気がつけば自分ももう時間が無い。今日一日がとても大切な時間となって追ってくる。

級友と別れてもう半世紀以上経っている、その間いちども違った記憶がない。強いて言えば中学三年の思い出ぐらい。彼は豪傑で挑戦的で逞しい人だったとの記憶がある。

生あるものは必ず死があると分かっている、いざ我が身になったとき、みなさんは何に価値を求めたろうか。

大分前に映画「おくりびと」が上映されましたがどのような思いで拝見されたでしょうか。人間の死と向き合った作品が上映され評価されている事に時代の流れを感じる。

近代において死はもっぱら忌むものとされて来た「生が喜ばなら死は悪、また生が有なら死は無」等とマイナスイメージでとらえられてきた。何人も死は遠ざけたい。しかしどんな権力者や富豪であれ万人は間違いない直面するのが死。今の人生がいかに楽しみに満ちていたものであっても必ず終わりが来る。愛する人との別れも避けえない。

「死」を西洋では一冊の本のようなものであるという。東洋では生と死は本の中のページ、ページをめくれば次のページがあるように常に生と死は繰り返す。ある。又「仏法」では生死不二と説き、疲れた体を休めるために睡眠をとるように死とは生き生きとした新たな生への出発準備であると説いている。

されば「輪廻」命あるものは永久に生

死を繰り返す。ならば「生が歓喜なら死も歓喜」で終われるように日々の行いも笑顔で朗らかに誰人とも仲良く生涯を閉じたいものですね。

金子さんはどんな思いで逝ったのだろうか、前述の通りなら、あの世で命の浄化を図り娑婆世界のどこかに誕生する事でしょう。

心より冥福をお祈り申し上げます。

合掌

卒業後健治さんへ会ったと言う人は少ないかもしれない。当時真坂峠で松倉ダム建設工事があり、同級の何人かは一緒に働いた。ダム建設が終えて彼が自衛隊に入隊するまでは仙道での同級会に何回か出てくれている。

いつも一人だった

佐藤芳雄

中学校三年も二学期頃からは特に私の相手をしてくれた。背が高いのに二人で一番前の席に座っていた。

卒業してからも夜には水澤先生の当直を選んで押し掛け勉強をし直すんだと力んだものだった結局続くことは無かったが、ことあるごとそばにいてくれたのは確かだった。

そのうちに私は集団就職で上京、彼との接触もできなくなった。

自衛隊で彼は重機の免許など拾得して土木重機のオペレーターなどをやりながら一男一女の元に家庭を築きあげていました。



1958年19歳の時の写真です。場所は中学校玄関前

その後彼であったのは、ずっと後になって私が妻と一緒に旅行した時であった。夕方になり盛岡駅の案内で宿を紹介してもらったのだが、それが駅からとてつもない遠いところであった。その日のうちに健治さんに電話をするとそこを動くなどくぎを差され、翌朝チェックアウトでフロントに出ると、彼は奥さんとともに待ちかまえていた。底は花巻温泉地、有名な湯治場なので名前だけは知っていた。車で来ていた彼はそのまま自宅までつれられ、しばししかもゆっくりとした時間を過ごすことができたものだった。

そのころはずでにパーキンソン病のかかっているという。こうしてお世話になりながらそれ以降会うこともなくしてきた。

最近になって北上に越されたと聞いたときには、たぶん息子さんと一

緒に暮らすことになったのだなど勝手に解釈していた実際に今は一緒に暮らしていると言うことでした。

奥さんから連絡を頂いたときにはもうご葬儀も終えられ一段落と言うときだったようです。

電話を頂いたときには実際に言葉もなくそのショックを隠し切れなかった。あんなに親しくしてくれていたのに自分はどうして今まで電話する出もなくそのままにしていたのだろうそんな情けない自分がとても悔しかったのです。おそらく私からの連絡を待っていてくれていたのだろうと思うとやりきれない気持ちになるのだった。情けない気分になるのだ。

それでも良くココまでがんばってきました。難病と言われる持病を抱えながら奥様と一緒に良くがんばってきたと思う。

これまで長い間同級生とも会うこともなかったが、今度は先に逝った人たちとゆっくりと話しもできるかもしれない。

ご冥福を祈ります。

合掌



中仙道の八幡様が

無くなる?

に息を切らして登る。この森の頂上に社があり、仙道を見渡している様なたたずまいです。

この八幡様が下仙道の八幡様と一緒にしてしまおうとはなしが持ち上がったようです。

「中仙道の八幡様が無くなるんだってよ」そんな風の便りがありました。そう言えば懐かしいですね。各集落が競って「フクダラ」を奉納したあの勇壮なお祭り。中殿では舞台をしつらえてこれも集落ごとの出し物があり地回りの興行もありました。アセチレンのにおいと喧嘩が八幡の森をにぎわしていたそんな時代。

中仙道の八幡様と言えば、田圃の中に構える森と言うより一つの山で、うっそうと茂る雑木、そびえ立つ参道の杉、くねるその根を階段代わり

元々中仙道も下仙道も本来開創・開基(一五七三年)されたのは修験者柴田修理と言われ統合されるには別に問題は無いと思われるのですが、どうもその理由が曖昧で、統合合祀に反対する人も多いようです。

もっとも大きな理由は、管理も大変だが祭りもできないと言うことなのです。昨年も今年もお祭りは行われないうことです。時勢に相応高齡化が進みまつり行事も大変、更に高台にあると言うことは準備作業もお祭りそのものも大変な労力になることを案じての氏子代表が決めたと言ふことらしい。ところが寝耳に水だった氏子のみなさんがかつてに決めてしまったと意義を申し立て始めた。

別当だろうが和尚だろうが。農民に取っては五穀豊穡家内安全祈願のよりどころ、今風にはコミュニティと意気昂揚の原点。それを無くしようと考えるのは時代の趨勢とは言え

意識的にも物理的にも合理性があるのかどうか疑問などころがあります。

あの杉根っこの参道も、昭和52年には幅一・八メートル石段のかず一四七段の立派な参道ができあがっているのだが、確かにこれを登るのはしんどい様です。まさかエスカレーターなどと言う人もいないでしょうが、氏子代表のみなさんもそんなことを考えてのことと思います。

確かに管理も大変なことでしょうだからといって祭りもできない神社は要らないと言うわけにも行かないでしょう。いかに生活文化の変化とは言え先人の開いてきた伝統行事を無視できないと思うのだが……。

合祀統合先の下仙道でも反対を唱える人が多いとか。特に中仙道ではそのため一戸あたり三万八千円の拠出が生じるとなるとおさらのことでしょう。

氏子代表と言えば昔から村の名士のみなさん、どうか今様に「民意」をくみ上げた上でことを運んでほしいものだと思うのですが。

どうか八幡の山を何時までも住民の心の洗濯場鎮守の森にしてほしいと思います。

(写真等資料として羽後町教育委員会「仙道の歴史を探る会」を参照させて頂きました)

西馬音内での NHKのど自慢大会

今年六月六日には、西馬音内の「総合体育館」でNHKのど自慢大会が行われ全国放送され、見られた方も多いことと思います。私もテレビを見る時間には事欠かないのでじっくりと見ました。

この「のど自慢」は、羽後町町制五十五周年を記念してのイベントだと町では報告していました。遠くに暮らす人たちは懐かしさを期待して観覧されたことだろうと思います。

のど自慢はいつものNHKの演出で地域コミュニティ楽しい番組。正直羽後町ののど自慢はあまりおもしろくなかった。町制五十五周年のイベントだというのにこのことには全くふれていなかったしいつも出てくる地域の紹介さえなかった。かつて名司会の宮田輝さん、出演者の話を通して町の話題を拾い出すそんな芸も全くなく、また歌自慢の大会にもなり切れていなかった。見終わって満足感がなくて「何だったんだ」

少々厳しかったかなあ

佐藤芳雄



(中仙道) 八幡神社本殿

東海豪雨から十年

高橋孝之助

九月七日、台風9号が大雨を伴って北上した。進路を読めないほどの予想ぶりだ。明けて八日九時三十分東海地方にすさまじいばかりの大雨を降らせた。時間は短かったが、雷とともに大雨となる。交通機関は軒並み運転見合わせで不通。

妻のリハビリのための病院に向かっていたが、キャンセルするべきだったと後悔する。

ふと、十年前の東海豪雨を思い出した。あのときに匹敵するほどの降りだったから。

十年前、九月十日、還暦祝いで秋田に帰っていた。十一日に名古屋屋空港についたときはすでに空は真っ黒、電車は不通。やっと来た一本の電車にスシ詰め状態で我が家の近くまで到着。クシーが来ない。雨と風がひどくなる。地面を叩く雨で足下は見えない。やっと来たタクシーも雨の方には行けません、という。私は北です、近くです、と。

以前そのときの様子を「まどい」

にも書いたが、いま十年経って
おなじ事が起こるとは……。

還暦から古希になってしまった十年間。同級生のみなさんにもいるいろいろなことが起きているようですが、どうかももう少し頑張ってみてみたいです。

金子健治さんも本当にお気の毒でした。心から安らかにとお祈りします。

けいゆうなガリ版セット

長い間愛用してきたガリ版用具、思い切って処分しました。「まどい」も後何号も続くこともないようなので今更ガリ版セットが必要になることもないでしょう、しかも三十年も使うこともなくそれでも大事に保管していました。

贈写版は二台あって最初の頃からのはあちこちと痛んでいました。二台目のはまだ十分使えるものでした。

創刊号から今日までの「紙面」も全号ファイルされていますが、これですべて静かに処分されることになるでしょう。ぼつぼつと整理を始めていこうとします。

大曲の花火

去る八月二十八日に行われた第十四回の「大曲花火大会」今年で百周年になるそうだ。

今まで見ることもなかったのだが今回はBS2でじっくりと見る事ができました。

全国から名だたる花火師が集い発表の場だとか。音楽に合わせて広がる花火の見事さにうっとりとした。空中で炸裂する花火はどこからでも見られるのですが、やはり特等席があるようでA席が一九〇〇円だそう。コンパネ二枚と言うから豊二豊分六名さま・だそうですね。

ボクの周りでも立川や多摩川など遠くに見ることができのですが、やはり比べものにならないものばかりでした。はらわたをえぐるような音、夜空の一瞬のドラマ。げんばで

見てみたいものです。



ソロソロの前にあがった花火を忘れることもありません、やはり見たいです。

編集手帖

まずは金子健治さんのご冥福をお祈りいたします。同級生では彼で十一人目になってしまいました。今までもどちがった寂しさを禁じ得ません。

自然のなす事に「異常」は通用しないでしょう。異常と言って騒いでいるのは人間だけ。それにしても今年の夏は暑かったですね。みなさんは熱中症大丈夫だったでしょうか。彼岸をすぎると今度は寒かったり、歳が高むと対応が鈍くなり大変です。

今から四十三年まえ、少し休刊後あらためて発行するときには亡き三浦浩二さんが「まどい」の役割は終わったのではないかと言われました。まさにその通りだったようです。

しかし私たちの暮らしを通して社会を見つめ合おうとの意義にかれも賛成してくれたものでした。でもそれもなしえられなかった自分の至らなさに悔しい思いもしている今日です。しかし二百号まではと頑張っています。もう少しおつきあいください。

※園部敏子さん、資金のご協力ありがとうございました。